

でも、遺跡を直に見ながら、歴史と触れあって想像力をふくらます、こんな歴史の楽しみ方も

あっていいんじゃないかと考えている。

## 兵庫・須磨歴史ウォーキング

大輪田泊、福原京、一ノ谷など平家と関係の深い神戸。住民は「平家びいき」と言われ、街のあちこちに平家にかかわる史跡や伝承が残っている。しかし最近、そんな「地域の記憶」がどんどん薄れていき、今度の震災でさらに拍車がかかるのではと危惧されている。若い人たちの間では、清盛塚などの史跡自体の存在を知らない人も多い。また平家伝承がいつ頃どのように生まれてきたか、かつての災害のなかで史跡がどのように維持されてきたかなど、歴史的に重要な問題も実はほとんど解明されていない。

まずは自分たちの目で史跡の現状を確認しようということで、さる5月10日（土）、ウォーキングが実施された。薫風かおる晴天のもと、参加者は学生を中心に市民・研究者など総勢30名余り。集合した高速神戸駅から山手にのぼり、荒田・平野・祇園と平家一門の別荘が立ち並んでいた往時の「高級リゾート」を巡った。庭池跡や貿易陶磁が出土した地点の背後、高台にある祇園神社に立つと、眼下の地形が、当時の宮廷社会で流行していた風水説の理想に近いことが判り、参加者を感じさせた。

そこから一気に下って兵庫津へいき、真光寺（一遍の墓所）、清盛塚の周辺を歩く。この辺りは神戸大空襲の被害が最もひどかった場所の一つ。かつては白かった花崗岩の一遍の墓（五輪塔）や清盛塚（十三層石塔）が、現在の黒色になったのも、空襲でたちこめた油煙のせいである。所どころ黒色がはげているのは、今回の震災で倒壊した時についた傷だが、よく観察するとかなり以前に（慶長の大地震？）欠けた跡もある。まさに数百年間の歴史が年輪のように刻まれている、貴重な地域遺産であることを再確認した。

その後、山電月見山駅から旧西国街道を須磨寺まで歩く。かつての街道筋はふるい景観の残る街だったが、今は更地やプレハブだらけで、2年半近くたってもまざまざと残る震災の爪痕が、一行を無口にさせた。須磨寺には青葉の笛をはじめ、かつての参詣者が目を輝かせて拝観した平家伝承にかかわる遺物が多い。それらが、ややさびれた宝物館に寂しげに並んでいるのを、少し複雑な気分で眺めた後、須磨の関の故地に立ち寄って、さらに海岸で解散した。

（文責・藤田明良）

## 西淀川での取り組み

かつて激甚な公害を経験し、先の阪神・淡路大震災においても多くの被害をだした大阪市西淀川区では、昨年、西淀川大気汚染訴訟の和解金の一部で、あおぞら財団（公害地域再生センター）が設立され、地域再生のまちづくりが行われている。史料ネットでも地域の歴史や文化を生かしたこの取り組みに協力している。これらの動きについては、本ニュース6号・7号でも一部紹介したが、今回はこの間の取り組みの実施結果について報告する。

### <西淀川の震災展>

1997年1月17日から19日まで、西淀川区のエルモ西淀川において「西淀川の震災展」が行われた。主催の「西淀川の震災展」を成功させる実行委員会は、あおぞら財団をはじめとする区内の住民によって組織された。震災展期間中は約900人が来場、関連行事にもものべ

約70人が参加した。

震災展終了後、この取り組みを記録に残そうと、同委員会は新たに震災展記録集発行委員会を結成。6月には『小さな街の大きな被害－西淀川の震災展』の記録集を発行した。なお、この記録集は一部300円（残部僅少）。お問い合わせは、あおぞら財団（TEL. 06-475-8885）まで。

### <大阪歴史学会見学検討会>

1997年3月16日、大阪歴史学会とあおぞら財団（公害地域再生センター）の共催、史料ネットの後援で、大阪歴史学会1996年度見学検討会「西淀川を考える－大都市近郊の歴史の変貌－」が行われ、約60人が参加した。午前中は西淀川区内の現地見学、午後は、エルモ西淀川において検討会を行った。

午後の検討会では、渡辺忠司（大阪市史編